大学間教育研究連携プロジェクト

綴り方教育と言語文化

2018（平成30）年度
言語文化研究所フォーラム

参加無料

申込締切
12月20日（木）

2018年12月25日（火） 13:30～15:30（受付開始13:00）

武庫川女子大学中央キャンパス MM-501（日下記念マルチメディア館5階） ※大学西門からお入りください

綴り方教育と言語文化
―フォーラムの開催にあたって―

司会：**玉井　暲**
（武庫川女子大学言語文化研究所所長）

ことばを「綴る」という営みは、言語と知力の活動が一つに結びついた営みである。子供は、生まれおちると、「自然に」ことばを操ることができるようになると見えるが、じつは、そこには、その言語的無垢なる子供をとり巻く言語的環境のなかで働いている言語使用のさまざまな型が重要な役割を果たしているにちがいない。特にことばを「綴る」、「書く」という営みは、言語使用のなんらかの「型」あるいは「慣習」があらかじめ整っていなければ、十分に機能しないのではあるまいか。この言語使用の型の形成に、言語文化が深く関わっていると想定すれば、綴り方教育の理念とその実践についての検証は言語文化の諸原理や諸相を解き明かすプロジェクトして、極めて興味深いものとして浮上する。綴り方教育と言語文化が交差する磁場を探ることを通して、新しい知の地平を拓いてみたい。

言語文化研究としての兵庫県下の「綴り方教育」研究の可能性

講師：**山﨑 洋子**（武庫川女子大学客員教授）

綴り方教育は、戦前戦後を通じて展開された日本固有の教育事象であり、それは海外で取り組まれている作文（composition）教育とは様相を異にしている。また、この実践は、地域や実践者によって表現や意味づけも微妙に異なるため、歴史事象として一義的に定義づけることは容易ではない。ただし、「綴ること」によって、学習と発達の根底にある生活認識に迫り、アイデンティティを育む、という教育目的は共通しているように思われる。実は、兵庫県には、「綴方は自己を綴ることである」と述べた芦田恵之助、『村を育てる学力』を著した豊岡の東井義雄、『学級革命―子どもに学ぶ教師の記録』を著した丹波の小西健二郎、『学級というなかま』を著した西宮の戸田唯巳など、著名な綴り方教師がいた。本発表では、日本の綴り方教育の一翼を担った兵庫県の綴り方教育の事象からいかなる言語文化の知見が出てくるかを意識しつつ、綴り方教育研究の可能性について考えてみたい。

綴り方教育の背景としての新教育運動

講師：**渡邊 隆信**（神戸大学教授）

「新教育」とは、19世紀末から20世紀初頭にかけて国際的に展開した教育改革の理論と実践の総称です。先進諸力国においては19世紀後半に近代の学校教育制度が確立していきます。当時は、教師が子どもに対して一方的に教科書の知識を詰め込むようなスタイルが一般的でした。そうした教師中心、教科書中心の教育（いわゆる旧教育）に対して、子どもの興味、関心や主体性を重視した教育（新教育）が、私立学校や師範学校附属学校を中心に徐々に広がっていきました。そこでは「子どもから」や「児童中心主義」をスローガンとして、諸能力の調和的な発達、教科横断的な学習、共同体としての学校、生活と学習の結合、といったことが強調されました。子どもが生活のなかから自己の思いや考えを書く綴り方教育もまた、こうした新教育の運動のなかに位置づけることができます。本発表では、綴り方教育の背景としての世界と日本の新教育運動について考えたいと思います。

東井義雄の教育評価論と綴り方・作文教育

講師：**川地 亜弥子**（神戸大学准教授）

東井義雄（1912-1991）は、日本のペスタロッチーと呼ばれ、綴り方教育だけでなく、学力論、教育評価論、学校づくりなどで、全国に名を知られた兵庫県の教師です。村を捨てる学力ではなく「村を育てる学力」、「一番はもちろん尊い　しかし一番よりも尊いビリだってある」のような、平明でインパクトのある言葉で自らの教育論を語りながら、日本の教育に影響を与えてきました。子どものありのままのいのちを重視する「いのちの思想」を提唱すると同時に、子どもの「生活の論理」の高まりを評価すべきと考え教育評価についても発言を行ってきました。学校では評価をしなくてはならないから、という消極的な理由というよりも、子どもから生まれる思考に注目するからこそ、そこを評価できる方法が必要だと考えていたのです。本発表では、東井の教育論、実践記録を紐解きながら、教育評価論と綴り方・作文教育についてみなさんと一緒に考えます。

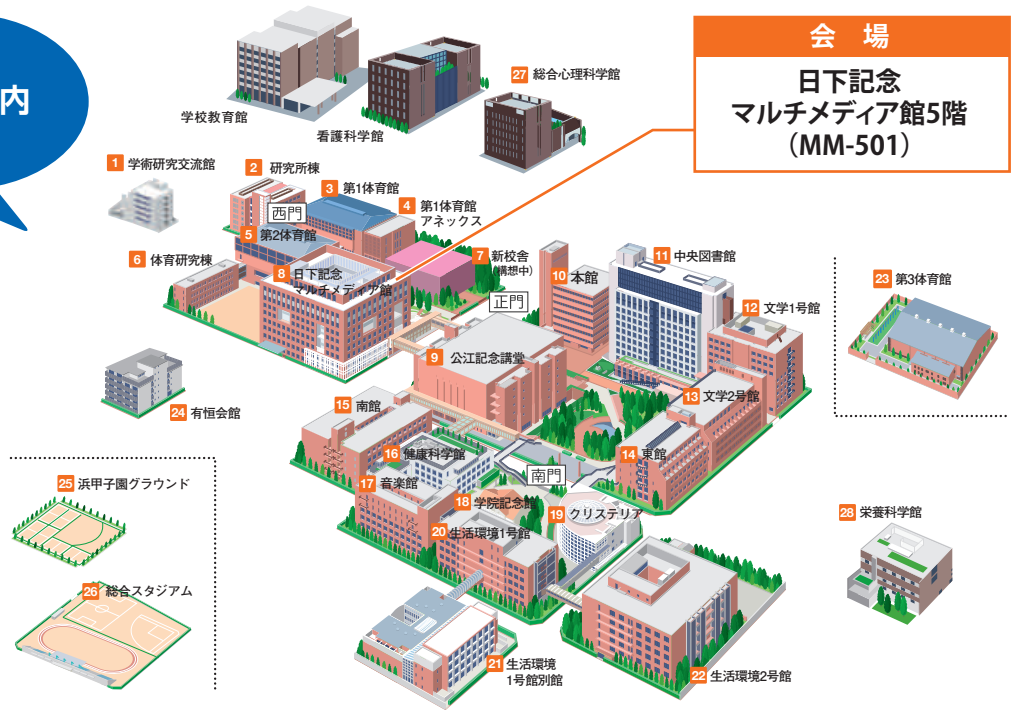
文章表現とSNS

講師：**岸本 千秋**
（武庫女子大学言語文化研究所研究員）

文章表現に関する大学の授業で、「作文」あるいは「文章表現」についての印象を尋ねると、ほとんどの学生が苦手意識をもっていると答える。しかし、同時に、文章を書く能力をもつことは、大学生にとって、また、これからの人生において大切で必要なことだと考えており、その能力を上げたいと思っていることも事実である。他方、LINEやTwitter、ブログなど、いわゆるSNS（ソーシャル・ネットワーキング・サービス）と呼ばれる媒体上では、記号を駆使した勢いのある文章が綴られており、SNS上においては、「作文」に抵抗が少ないと言えるだろう。SNSの文章には、記号類が多く使われていることが、大きな特徴の一つであるが、そこで使用される記号類は、その出現状況に一定の傾向が認められることが分かっている。本発表では、「作文」、「文章表現」に苦しみ、苦手意識をもつ若者が、「抵抗なく饒舌に」綴るSNSの文章の特徴を、記号類の使われ方という点から明らかにする。

申し込み 問い合わせ

申込方法：メール・ファックス・ハガキのいずれかでお申し込みください。
申込締切：12月20日（木）
メール：ilc@mukogawa-u.ac.jp
ＦＡＸ：0798-45-3574

主　催：**武庫川女子大学言語文化研究所**
〒663-8558 兵庫県西宮市池開町6-46（阪神鳴尾駅下車 徒歩7分）
TEL：0798-45-3536

会場案内